

最近のトルクメニスタンの印象

清水 学

筆者は2008年9月3日から9月10日まで一週間、トルクメニスタンを訪問する機会があった。トルクメニスタンの首都アシュガバードに入るにはイスタンブール、モスクワなどいくつかのルートがあるが、今回は週1便を往復させているウズベキスタン航空を利用した。9月3日HY771便で夜10時過ぎにアシュガバード空港に着き、旅行社からの招待状のファックスを見せてビザを入手する。手続きは意外に簡単で空港で両替を済ませ、車で首都中心部の法務省の前にあるトルクメニスタン・ホテルに投宿する。筆者にとってトルクメニスタンは1992年5月に初めて訪問してから今回は5回目の訪問にあたる。筆者は歴史の専門ではなく、旧ソ連圏に属した中央アジア諸国が経た激変、政治的にあるいは経済的にどのように変容してきたのかに関心を持つ、現状分析家に過ぎない。

筆者は今まで中央アジア5か国すべてを訪問しているが、そのなかでトルクメニスタンに、換言すればトルクメン人の他の中央アジアの人々とは異なる独自の個性に一種の親近感と魅力を感じている。トルクメンの人々は概して直線型で素朴であるという印象がある。他の中央アジア諸国と同様、チュルク系遊牧文化、ペルシャ文化、イスラーム、ロシア・ソ連文化など重層的な影響が見られるが、ロシアに最終的に併合されたのは1886年という相対的に遅れた時期であることもトルクメニスタンが独自の雰囲気을維持している理由かも知れない。ここでは今回の訪問に関して印象風的なタッチで報告を書いて見たい。

トルクメニスタンの地政学的条件

トルクメニスタンは中央アジア5か国のなかでは最西に位置しカスピ海に面している人口500万人弱の規模の国である。面積は日本の1.3倍であるがほとんどがカラクムなどの砂漠地域である。現在、他の中央アジアの国々と同様に砂漠化の問題に悩んでいる。国境を接している国はウズベキスタン、カザフスタン、イラン、アフガニスタンである。内陸国ではあるがカスピ海に面しており、カスピ海を挟んでアゼルバイジャン、ロシアともつながっている。

る。トルクメニスタンにとって天然ガス輸出が極めて重要で、世界で5番目の埋蔵量を誇っている。経済的な生命線である天然ガス輸出はロシア経由のパイプラインにほとんどを依存しており、その点ではロシアとの天然ガスの価格・輸送に関する交渉が独立トルクメニスタンにおける政治面でも経済面でも最も重要な外交課題となっている。現在トルクメニスタンのガスの最大の顧客はウクライナであり、従って最大の貿易相手国でもある。現在のロシアとウクライナのガスを巡る衝突はトルクメニスタンにとってよそ事ではない。トルクメニスタンにとっての課題は、ガスの輸送ルートをロシアに依存するという状況から脱却し、輸出ルートの多角化と輸出先の選択肢を拡大するということである。今まで、イラン・ルート、アフガニスタンを経由するパキスタン・インド・ルート、ナブッコ構想（カスピ海底を経由してアゼルバイジャン、さらにトルコ、ブルガリアを経て欧州に至るパイプライン）さらに中国ルートなどの可能性を模索してきた。中国ルートのパイプライン建設はすでに着手されており、2年ほどで完成と伝えられている。これが稼働することになれば、ロシア・中国関係にも微妙な影響を及ぼすことになる。トルクメニスタンはその独自の政治体制にも関わらず、それは米国の「民主化」外交の対象に挙げられることはほとんどない。米国・欧州がトルクメニスタンの地政学的重要性を重視していることの反映である。米国が現在、最大のODA（政府開発援助）の供与国となっていることにもその独自の地位が示されている。

国民統合の課題

他方、国民統合はトルクメニスタンにとって最も重要な課題の一つである。現在の国境が基本的に制定されたのはソ連時代初期1924年の民族的境界区分によるものである。1991年の独立が他の中央アジア諸国と同様に、激しい民族運動に支えられたものでなかっただけに、独立国家を育成・強化していく課題には独自の複雑さが看取できる。トルクメニスタンは他の中央アジアとは異なり、名称民族であるトルクメン人が約85%という多数を占め、多民族国家ではあるが民族構成としては均一性が強い。その代わり部族間関係の調整が国民統合の点で重要性が大きくなっている。しかし周辺諸国と諸民族の居住地域が交錯しており、ウズベク人同様、トルクメン人はアフガニスタンでも有力少数民族として居住している。

カスピ海を渡るとコーカサス世界が展開しているが、カスピ海を挟んでいるコーカサスと中央アジアの間の歴史的相違は大きい。コーカサスはバクーの油田に代表されるように19世紀末からロシアの資本主義化の重要な一翼を担っており、ロシアのなかでは「先進地域」の一つを構成していた。グルジア人である若きスターリンがバクーで石油産業関係の労働運動や社会主義革命運動を展開していたことはよく知られている。それに対してトルクメニスタンなどの中央アジアは遊牧世界がソ連時代に入っても残り、相対的な「後進地域」のイ

メージが残っている。そのなかでトルクメニスタンはウズベキスタンと比較しても「後進地域」というイメージが強い。トルクメン人が同じチュルク系のアゼリ人に抱く感情は複雑で、アゼルバイジャンとトルクメニスタンの間の関係が時々ギスギスするのも、このような意識の差を含む歴史的背景も反映している。

国民統合の課題はトルクメニスタンの国章、国旗、あるいは大統領章などにも反映されている。そこにはいくつかの共通のシンボルが援用されている。これらすべて緑色の地を共通とするが、これはイスラームを指すと見られる。馬が国章の真中に描かれているが、国旗や大統領章には馬が描かれていない。しかし馬はトルクメン人にとって重要なシンボリックの意味をもつものであることは間違いない。首都アシュガバードには巨大な競馬場があり、レースの日には子ども達も多数競馬場に参集する。もう一つ馬とならぶトルクメン人の重視するのは絨毯である。ちなみにアシュガバードの絨毯博物館には世界最大の絨毯といわれるものが展示されている。

国章にも国旗にも5つの絨毯のデザインが描かれているが、それぞれがトルクメニスタンを構成する5つの部族（地域）を代表するものと理解されている。アハル、バルカン、ダソグス、レバク、マリーの5つの州（行政区）とほぼ重なりとみなされている。5つの部族、地方の統一こそが重要であることを意味するものであろう。その点で5という数字はトルクメニスタン統合の重要なシンボルとなっており、三日月の上に5つの星が国章、国旗、大統領章すべてに描かれている。また大統領章には5羽のタカがへびを押さえつけている絵が描かれている。またいずれにも白色の三日月とそれに抱かれた形で5つの星が描かれている。

独立以後の印象の変化

筆者が初めてトルクメニスタンを訪問したのは1992年5月であり、ソ連が解体されトルクメニスタンなどが独立してから約半年経った時期であった。それは通産省の官民のミッションに研究者として加わったものであったが、日曜日であるにもかかわらず、閣僚が出勤し我々との会談に出席してくれたことが印象に残っている。しかし首都アシュガバードはタシュケントやアルマトィの美しさと比較すると格段とみすぼらしく、道路は舗装されてはいたが穴だらけで街灯がほとんどなかった。夜に明かりのない街を歩くことは危険で、通訳をやっていたロシア人の友人と夜、街を歩いていて道に迷ってホテルを見失ってしまったことを覚えている。またコルホーズ・バザールと称される市場があったが、大きな売り台が横にならべられていたが、その上には瘦せたきゅうりとキャベツが数個置かれていただけであった。ソ連時代末期から独立直後のトルクメニスタンの貧しさを痛感させるものであった。同行した日本人が地元のたばことして購入したといって吸っているのを見ると、エジプト製の

「クレオパトラ」であり、競争力のないエジプトタバコがトルクメニスタンに市場を得ていたのに驚愕したことを覚えている。しかし今考えると一種のバーター貿易であったとも考えられる。

その後のトルクメニスタンは行くたびに大きく変貌している。何よりもガス収入を基礎に記念碑的建造物が増加し、首都アシュガバードの町並みは美しくなり、夜のまちは電灯とネオンで煌々と照らされる明るい街になった。郊外にはややけばけばしい色で趣味は決してよくはなかったが、新興ホテルが雨後のたけのこのようにできてきた。ごみごみとしてシシカバブを焼く匂いが立ち込めていた都心のバザールも様変わりし、今回の訪問でロシア・バザールとして3階建ての近代的な大バザールとなっているのを発見した。アシュガバード郊外の伝統的なバザールであるトルクチュカ・バザールを見たが、非常な活気を呈しており、中国製品を含め品数は多い。トルクメニスタンは都市と農村の格差など隠れた問題はあるが、表面で見る限り大きく豹変したといってよい。

今回、カスピ海沿岸の港町トルクメンバシ(旧名称:クラスノヴォーツク)を初めて訪問した。時間がなく航空機で往復し1泊しただけではあったが、いくつかの発見もあった。クラスノヴォーツクはロシア軍が1869年にトルクメニスタン地域の最初の要塞をつくり進出の橋頭堡を確保した所である。空港から街へ行く途中、切り立った岩の間の道路を通過するが、アルメニア人ガイドによると第2次大戦直後、日本人捕虜がつくった道路であるという。また日本人が建設した建物が現在でも公的機関に使用されているそうである。それが日本人の技能に対する高い評価と結びついているという。行くことができなかったが日本人墓地もあるという。他方、バザールではアルメニア人などが重要な役割を果たしており、その分野ではトルクメン人の役割はまだまだのようであった。他方、トルクメンバシは重点開発地域の一つとなっており、一連の高級ホテルがあり、さらに建設中であつた。カスピ海は近所の住民や一部観光客の海水浴場となっている。石油ガス探査も行われており、ホテルではマレーシアのペトロナス社員と会って話をした。「マレーシアは今や技術援助をする立場になった」と誇っているのが印象的であつた。

「中立国」トルクメニスタン

旧ソ連中央アジア諸国5か国のなかでトルクメニスタンは政治的にも強い関心を引き起こしてきた国である。トルクメニスタンは中央アジア諸国のなかでも一種の「一匹オオカミ」で独自の対外路線を追求してきた。他の中央アジア4カ国の政治経済面での共同行動などに対してはただ1国、消極的で独自路線をとった。「中立政策」を志向し、中央アジア協力機構(CACO)にも参加せず、またCIS(独立国家共同体)の安全保障機構にも当初から参加し

ていない。ロシアが CACO が吸収統合して結成されたユーラシア経済共同体（EEC）にも参加していない。旧ソ連のうちバルト3国を除く国々で結成した CIS（独立国家共同体）において 1995 年 8 月に正式加盟国から「準加盟国」に格下げを行っている。これにはトルクメニスタンが 1995 年に中立国宣言を行い、国連でも永世中立国として承認されていることも関連している。「中立国」というのはトルクメニスタンを理解するキーワードの一つであり、政府系出版物には必ずといっていいくらい、「中立のトルクメニスタン」という用語が頻繁に引用される。

トルクメニスタンの外交面での独自性は対アフガニスタン問題でも示された。アフガニスタンと国境を接している中央アジアの他の2カ国であるタジキスタン、ウズベキスタンとは異なり、タリバーンがカーブルを制覇した 1996 年以降 2001 年の同政権崩壊まで、タリバーン勢力と独自の友好関係を構築することにより、タリバーンの脅威を中立化するのに成功してきた。つまり正式の国交は北部勢力の「正統政府」と維持しつつも、首都アシュガバードにはタリバーン政府の常駐代表部の設置を認めており、バランス外交を巧みに維持していた。タリバーンはトルクメニスタン内政に干渉しようとはしなかったため、アフガニスタンとの国境は概して平穏に保たれた。

首都アシュガバードはイランとの国境となっているコペトダグ山脈の麓に位置しており、イランのホラサーン地域の中心都市マシュハドから遠くはない。イランとの文化的宗教的交流は長い歴史を誇るが、ソ連時代の政教分離政策の影響、シーア派が少ないことからイラン革命の影響力は限られており、いわゆる「イランの脅威」は感じられない。同時に米国などのイラン攻撃に国土が利用されることには強く警戒しており、そのことがイランとの関係を波風立てないものにしている。

トルクメニスタンとイスラーム・民族主義

表面的に見る限り、トルクメニスタンでのイスラームは政治勢力としても限定的であるようにみえる。しかしトルクメニスタンも独立以降はイスラームをトルクメン人のアイデンティティーとして一面強調しており、いくつかのモスクが建設されている。この官許型のイスラーム復興は静かな影響を与えているように見える。特に若年層の間の宗教回帰の傾向は徐々に強まっているとするトルクメン人の発言もある。

9月4日にニャゾフ前大統領が埋葬されているルーヒ・モスクを訪問した。前大統領の墓は両親と兄弟の墓と一緒に並んでいるが写真撮影は禁止であった。なおこのモスクは一時に2万人を収容できるとされる規模を誇る新しく建設された巨大なものである。

9月5日にアナウの大モスクでの聖者崇拝を見た。アシュガバードマリー道路に沿って

首都から東方に12キロ、カラクム砂漠とコペットダグの間にある15世紀の建造物でジャマール・アッディーンのコムプレクスとして知られている。注目すべきことは今日においても子供を授かることやさまざまな願いごとを持つ人々がかなり来ていることである。ホラサーンがティムール時代の総督で支配されていた頃に地方の資産家のムハンマド・フダイドート(1446-1457)によって父の墓の側にたてられ、その資金はジャマール・アッディーンが出したとされている。葬儀の場所(Ziyarat-khana)、放浪するスーフィーのクロイスター(Khangah)、巡礼者の部屋、マドラサで構成されている。フダイドート父子の墓があり、そこには数人の女性と2、3人の男性のグループが墓の前の手形に手を置いて拝んでいた。モスクの中央モスクのドアに竜の像が描かれている。聖者崇拝の一種であるが、筆者のやとった車の若い運転手が熱心に拝んでいる姿は印象的であった。

トルクメニスタンは北朝鮮と類似しているか

独立した直後はトルクメニスタン共産党第一書記(1985年就任)であったニャゾフ(Saparmurat Atayevich Niyazov)は新独立国家トルクメニスタンの最高指導者に「横滑り」して大統領に選出された。ニャゾフは強固な指導力を発揮し、次第に独自の個人崇拜体制を作り上げた。トルクメニスタン共産党をトルクメニスタン民主党に衣替えするとともに唯一の合法政党として存続させた。共産主義者から伝統的なムスリム、強烈なトルクメン民族主義者へのイメージ・チェンジを果たしたニャゾフ大統領は1990年代を通じて野党勢力あるいは反対派を放逐して個人崇拜的支配体制を強め、1999年には終身大統領の地位を認められた。ニャゾフ大統領はトルクメンバシ(トルクメン人の父あるいは指導者)という呼称も定着した。その後、月名や曜日名をトルクメニスタン特有なものに変更するなど、民族主義的政策が一面極端といえるほど促進された。国威あるいは大統領の権威を高めるための巨大な大統領の銅像や建設物が建立された。

トルクメニスタンのニャゾフ体制を北朝鮮と類似しているとする論評が日本のジャーナリズムなどで散見されるが、筆者の印象はかなり異なる。少なくとも外国人旅行者にとってトルクメニスタンは北朝鮮よりはるかに自由に動き回れるし、また現地の人に自由に話しかけることができる。2006年夏に訪問した平壤ではガイド通訳が強制的についてまわり、原則として自由に街を歩き、現地の人と交流することは難しかった。ホテルも外国人が宿泊できるのは3か所くらいに限定されていた。また最高指導者が「アンタッチャブル」という点ではおそらく同様であろうが、トルクメニスタンではガイドが最高指導者に言及する雰囲気も相当異なっている。トルクメニスタンでは通訳がニャゾフ大統領のことを英語で“Big boss”として紹介する時も、神格化しているイメージは伝わらない。ニャゾフ大統領につい

ても、「孤児として随分苦労したようだ」という程度であった。政治的反対派にとっては厳しいであろうが、町の雰囲気への自由度は全く違うといつてよい。一定の制約があるにせよネットカフェが認められている。他方、北朝鮮はまだインターネットではなくイントラネットである。つまり国内サイトしか見ることができない。トルクメニスタンでは非常に限定的な規模であるが証券取引所もある。また都市のバザールを見る限り品物ははるかに豊富であり、その点でも北朝鮮とは異なる。ガス輸出国の強みかも知れない。またニャゾフ大統領がすでに死去していることも雰囲気を緩やかにする影響があるかも知れない。

トルクメンバシ（ニャゾフ大統領）の思想

ニャゾフ大統領は1940年2月17日生まれで、父は大祖国戦争でナチスと戦い戦死し、母や兄弟は1948年のアシュガバードの大地震の際死亡している。都心には子供を守ろうとする母の像が建てられており、ニャゾフ自身の経験が重ねられている。ニャゾフは孤児として遠い親戚の家で育てられた。1962年に共産党に入党し、党内の階段を順調に出世し、1985年にトルクメニスタン共産党第1書記に就任している。それは1985年にソ連共産党の新書記長に就任したゴルバチョフが「ペレストロイカ」の一環として汚職キャンペーンを展開し、前第1書記のムハメトナガル・ガブロフを綿花汚職容疑で解任した結果である。ニャゾフは1990年に国家元首に相当するトルクメニスタン最高ソビエト議長に就任した。ニャゾフは当初1991年8月の反ゴルバチョフ・クーデターを支持したが、その失敗が明らかになると、独立に向け大きく路線変更を行い、同年10月21日に独立宣言を行った。ちなみに中央アジアの他の国々の最高指導者も同様なプロセスで路線転換をはかっており、トルクメニスタン特有の現象ではない。1992年6月に選挙により大統領に選出され、翌年にはトルクメンバシと名乗るようになった。1994年の国民投票で2002年までの大統領の任期延長が承認され、1999年12月28日には永世大統領となった。これにより個人崇拜体制は完成したといつてよい。なおニャゾフの妻はユダヤ系ロシア人で二人の子供がいるという。

後述するニャゾフがアッラーのインスピレーションによって書いたという「ルーフナーマ」では、自らを最初からアッラーを支えにして人生を生きてきたと記されている。またトルクメン民族に対する誇りが様々な苦難を乗り越える支えになってきたとして民族主義者としてのイメージを演出している。また共産主義とソ連に対する厳しい批判を強調している。前共産党第一書記時代にすでに共産主義に対する確信を失っていた可能性もあるが、基本的には現在の必要性から過去を書き換えたものであるといえよう。明らかなのは、独立トルクメニスタンの国民統合においてイスラームと民族主義を支柱にしようとしていることである。その場合、どちらかといえば民族主義の方がはるかに強い。

同時に留意しておくべきことは、独立後の1992年に制定されたトルクメニスタン憲法において、世俗主義が明示されており、イスラームに特別の地位は与えられていない。また明示的にイスラームに対する言及は一か所もない。その点ではソ連時代の世俗主義の原則を継承していることは間違いない。第1条では「世俗主義国家」とされ、第11条では次のように規定されている。「国家は宗教と信仰の自由、その法の前での平等を保証する。宗教団体は国家から分離されており、国事に介入し、政府機能を果たすことはできない。国家の教育システムは宗教組織から分離し、世俗的性格を維持すべきである。各人は自主的に自らの宗教との関係を決めるべきであり、個人あるいは集団であれ、いかなる宗教に対する信仰を表明すること、あるいは決して表明しないこと、宗教に関連した信条を表明し拡大すること、宗教的クラブ、儀礼、儀式遂行に参加することなどの権利を持っている。」

「ルーフナーマ（魂の書）」

ニャゾフ前大統領の著書である「ルーフナーマ（魂の書）」は、トルクメン人の民族主義を称揚する事実上、聖なる書として特別の扱いを受けてきた。ニャゾフ前大統領とトルクメニスタン政府が「ルーフナーマ」の普及に如何に力を入れたかは、いろいろな形で表れている。都心に「ルーフナーマ」を模った建造物が記念碑とされているほか、いまや小学校から大学に至る教育の場で「ルーフナーマ」は必修・入試科目となっている。テレビでトルクメニスタン陸軍の行進をみたが、先頭の兵士が「ルーフナーマ」を高く掲げて行進していた。同書は日本語を含む約30以上の外国語にも翻訳されており、都心にあるロシア・バザールの入り口近くにある政府系書店には「ルーフナーマ」の各国語版が提示・販売されている。ニャゾフ前大統領が「ルーフナーマ」の第1版を出版したのは2001年であり、第2版は2004年に出版されている。トルクメニスタンにおける「ルーフナーマ」の位置づけはイスラームの観点からすれば微妙なものがある。「クルアーン」というまでもなくイスラーム教徒にとって至高のものであり、他の書籍と比較できるものではないが、限定付きを条件に「ルーフナーマ」をできるだけ「クルアーン」に近づけようとしてきたように見える。一部では「ルーフナーマを3回読むと天国にいける」という言説も伝えられる。

「ルーフナーマ」の最初に掲げられている「宣誓」は、祖国と大統領への忠誠心を次のように非常に激烈な言葉で宣言している（以下日本語版「Ruhnama」より引用）。

「聖なるトルクメニスタン、私の祖国、あなたに捧げてもいい、この命を、この身体を！もしも私があなたのことで少しでも疑いを持てば、私の手は腐るがいい！もしもあなたの悪口を言えば、私の手は腐るがいい！祖国を偉大なるトルクメンバシを裏切ったら命がなくなるがいい！」

「ルーフナーマ」の内容は4つのものが交錯して繰り返し登場している。ひとつはアッラーに対する信仰を繰り返し呼びかけていること、偉大なトルクメン民族の特性と過去の歴史、ソ連時代の批判的回顧、大統領の自伝・エピソードである。そのなかでトルクメン民族が過去300年間苦しい運命をたどってきた理由について次のように要約している。「国家が崩壊され、部族間に戦争が起こり、起源を忘れ、宗教を捨て、言葉が貧困になり、何年間も頑張って育てた馬や絨毯、服飾や飾り、伝統などの文化をなくすような状態になってしまったのです（14 頁）」

「ルーフナーマ」などで強烈なトルクメン民族主義が強調されている背景としては、トルクメニスタンの独立そのものに際しての指導者の認識であろう。独立に関して次のように記している。「最初は、独立国家であったことを証明するのは書類だけであり、進歩する社会や行政を行う公務機構や独立主義、自力で生存する経済と他国との協力などの決着はまだ済んでいませんでした」と述べた後、「最も困難なのは、国民の当時の判断力と思想では『独立』と『独立の有利な点』を理解することが無理であったことでした」とし、トルクメニスタンの独立が事実上「受け身の独立」であったことを告白している。しかし「受身の独立」という点ではトルクメニスタンが特殊ではなく、中央アジア諸国は概して同様である。名称民族の民族主義を高揚せざるを得ないのは、旧ソ連圏では共通しているが、特に中央アジアでは民族主義のイデオロギー的構築を一層重視せざるを得なかったといえよう。

「ルーフナーマ」で描かれているトルクメン民族史は史実というより、民族的ロマン主義として読むべきものである。トルクメニスタンに限らず現在の新興国において、歴史学は考古学・古代史を含め、著しく政治化されやすいことは周知のことである。何よりも、それぞれの国における国民統合の課題に深く関連しているためである。ウズベキスタンのサマルカンド大学のジュリボイ・エルタザロフ教授は「ルーフナーマ」に関して次のように述べている。「『ルーフナーマ』では、テュルク系の民族は本来すべてトルクメン人であると宣言されており、トルクメン人と何千年も共生してきたトルキスタンの諸民族、たとえばウズベク人といった名前は出てくることがなく、あたかも中央アジアにはトルクメン人のみが存在していたかのように記されている。」とし、「トルクメニスタンの豊富な石油とガスを狙って、より有利な協定を結ぶことを望むいくつかの国や企業は、故トルクメニスタン大統領に好意を持たれるべく、学術的性格からかけはなれたルーフナーマを様々な言語に翻訳し広めることに貢献した」として批判している。

「レンティエ」国家としてのトルクメニスタン

独特な個人崇拜体制を作り上げたニャゾフ前大統領のトルクメニスタンの政治体制をどう

規定すべきであろうか。それを考える上で、最大の財源である天然ガス輸出収入を大統領が掌握し、その利益を配分することで支配体制の強化を図ってきたことを考えれば、一種の「レンティエ国家」(金利またはレント生活者国家:天然ガス収入を一種のレントと考える)と規定することができよう。それと根強く生き延びてきた部族社会がモスクワからの干渉・介入の圧力が弱体化したことで存在感が強まっており、その間のバランスをとる形で部族社会の上に立つ権力が必要となった。またソ連時代の負の遺産としての強権体制などが重なったものであろう。レンティエ国家の理解は多様であるが、富の配分で国民の消極的支持を獲得しつつ、政治的自由は最小限に限定して自らの支配体制を維持するものである。富の源泉は資源輸出など外部に依存している点も、もう一つの特徴である。トルクメニスタンの国家財政は予算外予算の比重が高いとみられ、財政の透明性は著しく低い。大統領が議会の手続きを経なくても済むかたちで、天然ガス関連の巨額な歳入を掌握していたとみられる。ソ連時代の統治技術も生き延びており、両者のドッキングと最高権力者の個性や地政学的条件から、トルクメニスタンの独自の体制が形成されてきたといえよう。経済社会政策は旧ソ連圏では最も変化を受けなかった国であり、その意味ではグローバル化が進んだ現代世界のなかで独自の「陸の孤島」的存在を示している。ガス・電気料金が事実上無料であり、住宅費も低く抑えられている。これはいわゆる「レンティエ国家」として生活の一定の保証と政治的権利の放棄の取引と見る事が可能である。

ベルディムハメドフ体制をどう見るか

独立後のトルクメニスタンを独自の色彩で彩ってきたニャゾフ大統領は2006年12月に急逝し、保健相などの経験を有するベルディムハメドフが後継大統領に就任した。後継問題はほとんどめななかった。国内外で注目されたのは、新大統領によりトルクメニスタンはどう変わるのか、あるいは変わらないのかということであった。結論的にいえば、レンティエ国家体制は基本的に不変であるが、そのスタイルにおいては変化が見られるということであろう。今やニャゾフ前大統領の肖像画は町ではほとんど見かけず、それに現大統領の肖像画が完全に入れ替わっている。2008年9月の憲法改正で二院制から一院制へ移行し、一院制となったメジュリス(国会)の定員は65議席から125議席へ増加された。国歌からトルクメンバシの名前が削除されるなど、新しい大統領体制が着実に定着しつつあるように思われる。

新大統領であるグルバングリ・ミヤリクグリエヴィッチ・ベルディムハメドフは1957年6月29日に現アハル州に中等学校の体育教師の家に生まれた。前大統領より17年若返った指導者である。医者であったこともあって科学技術などでのトルクメニスタンの遅れなど

の認識もあり、対外的に緩やかであれ、門戸開放の必要性は認めている。新大統領の外交活動は活発である。上海協力機構へのゲスト出席、カーブル訪問、テヘラン訪問など全方位外交を展開している。米欧は民主化要求よりもトルクメニスタンの置かれた地政学的重要性とガス資源の供給国の役割に期待しており友好的な姿勢を維持している。

トルクメニスタンにも国際的な経済危機が反映し始めており、2008年のGDP成長率2.5%に減速した可能性もある。筆者がトルクメニスタンを離れた直後にアシュガバードで小暴動が伝えられた。2008年5月に公式レートと商業レートの二つの為替レートが一本化され、09年1月から5000マナト＝新マナトへのデノミも行われた。政府はガス収入を基礎に安定化基金を創設している。世界同時不況はトルクメニスタンにも及んでいるが、グローバル化が進んでいない分、影響をある程度遮断するメカニズムも働いており、また、資源保有国としての立場はそれほど弱体なものではないと見られる。

(帝京大学経済学部)